

東北地方太平洋沖地震被災地支援活動の記録

派遣職員 松 下 き み 子

所属 地域医療推進課

<p>1 派遣期間</p> <p>平成23年4月5日 ~ 平成23年4月9日</p>
<p>2 派遣先及び主な活動場所</p> <p>仙台市若林区 六郷中学校体育館避難所</p>
<p>3 支援活動の内容及び活動の状況</p> <p>(1) 避難所支援 230名位が避難生活をしている。館内は、一面毛布が敷かれ、衣装ケースや段ボール箱が境にある程度。</p> <p>興奮状態の活動的で一見元気に見える時期から、今までの緊張や過労が出てくる時期。感染症（ノロウイルスやインフルエンザ）の流行が心配されていた。</p> <p>避難されている方の健康支援、健康相談 必要に応じ市の職員（保健師）に報告、心のケアチーム、更正相談所など専門機関への相談を紹介、医療機関受診勧奨。</p> <p>避難所の加湿、換気やトイレなど環境整備</p> <p>(2) 家庭訪問 地図を見ながら、各家庭に2人1組で訪問。</p> <p>指定された地区内の住宅に居住されている方の把握（地震や津波で被害を受けられた方が親戚や知人を頼って、身を寄せている場合もある）</p> <p>在宅酸素療法や認知症のある方など在宅医療や介護を受けられている方の状況把握、健康状態確認。</p>
<p>4 活動を通じて感じたこと</p> <p>(1) 避難所の在り方</p> <p>体育館や教室など非日常的なところで、老若男女が大勢で生活することになる。</p> <p>子ども、高齢者、障害者及び在宅療養中など支援を要する方の対応について、長期にわたることも考えてどのようにするか考えておきたい。</p> <p>(2) 住民を世帯として把握</p> <p>仙台市では、地区の住民を世帯として把握できている。子ども、高齢者、障害者などを含め世帯として状況を把握しておく必要がある。</p> <p>(3) 市役所業務継続計画と防災体制</p> <p>緊急時は指揮命令が一つになり、各部署は目的に従い活動をしていく。</p> <p>情報の把握と共有が重要。職員としても指示待ちの姿勢では対応できないため、目的に添い自分自身は何をすべきか考えて動く姿勢が求められる。</p> <p>また、緊急時の業務継続計画も各段階に応じた市役所体制がとれるようにしておくことが必要。計画の中には、他県などからの支援が入ることも想定し、被支援内容について考慮しておくにより現実的。</p> <p>(4) 自助と共助の意識</p> <p>災害は想定どおりにはいかない。</p>

いざという時は、自助と共助は柱となる。お互い様の意識を育てるのはどのようにするのか。住民の意識が多様化し、個人情報保護意識で緊急時を乗り越えられるか疑問。

(5) 避難所の運営（自治会活動）

避難所は自治会が運営するが、避難所の統制力、決め事、役割配分など期待される部分が多い。自治会活動に、女性の声も必要。

5 支援活動から見た被災状況など

妻の形見のスカーフを巻いている姿、親族を一度に亡くした方、私たちよりもっとひどい人もいるからと全て失っても我慢している姿、何度も「ありがとね」と涙ぐむ姿、「一緒に死んだほうがよかった」とぼつりとこぼす方、津波の現場に落ちていた英語のノートの子元気だと良いけれど、などなど非常に甚大な被害を受けた方々のことを思い出すと胸が詰まります。

また、市役所職員は不眠不休で業務をこなしており、本当に疲れていると思われます。長期戦になるにつれ、燃え尽き症候群や心身ともに不調に襲われる可能性が強く、職員への支援も視野に入れる必要を痛感しました。

「今年の桜は咲かないかも・・・」と話されていましたが、草の中に新芽がありました。被災者にも被災地にも回復力がありますので、気持ちの中にも桜が咲く日が訪れることを期待します。

4月5～9日 仙台市若林区の状況



どこまでも続く津波の現場



こんな大きな木も根こそぎ倒れていた。
津波の力はすさまじい！



体育館が避難所
230名位が暮らしていました。